

奥多摩のせし



# 奥多摩

《第26号》

平成24年7月15日  
奥多摩観光協会



木匠画 安藤修二

〈鹿島踊り〉  
国指定無形民俗文化財  
九月第二日曜日  
小河内神社にて

## ごあいさつ

「奥多摩」という地名が世に出たのは、昭和2年に大阪日日新聞が「新日本百景」を広く読者から募集した時に、初めて使われたと聞いています。羽村の堰から上流、日の出町、旧五日市町、檜原村をも含む地域の総称だったと思われます。

昭和5年、これからの観光の時代を先読みし、佐久間鶴吉さん(一心亭創業者)が鳩ノ巣溪谷に蕎麦屋を開業します。多摩川に降りる道は、けもの道のように細く、一週間誰も降りてこない時もあったと聞いています。しかし佐久間さんの予想は当たり、昭和11年には小河内貯水池建設工事が着行、奥多摩への観光客は日ごと増えていき、鳩ノ巣には旅館、飲食店、お土産屋など数店が開業、第1期の観光ブームを迎えます。

しかし、そのブームも続かず、時代は第2次世界大戦へと向かい、やがて敗戦、復興へと進みます。第2期観光ブームは、建設を再開した小河内ダム抜きには語れません。当時、東洋一の規模を誇るダムの完成は、多くの観光客を奥多摩へと向かわせま

す。竣工は昭和32年、観光客は60万人(年間)と記録にあります。ダムによる観光ブームは、その後東京オリンピックの行われた昭和39年ごろまで続きます。ダム観光ブームが去っても、時代は、高度経済成長時代に入り、奥多摩は近くて身近な観光地として、多くの観光客を迎え入れます。最高入込客数は約220万人(年間)とされています。

そして平成24年、昭和の時代「観光地」と言われたところは、いまでも集客数を減らし、厳しい状況が続いています。奥多摩も同じような状況です。しかし、こんなに恵まれた観光地もそうありません。都心からわずか2時間、東京都民、埼玉、神奈川、千葉県民を合わせると、3,900万人の人たちが身近なところで暮らしているのです。その中のほんの数パーセントの人たちに奥多摩のファンになってもらえたら、リピートしてもらえたら、と思います。

奥多摩観光ガイドの会の皆さんと一緒に知恵を出し合い、奥多摩の魅力を発信していきたいと思えます。

(奥多摩観光ガイドの会 会長 原島俊二)

# ～ 赤 さ っ せ ん ～

## 駅から登る本仁田山

コース: 奥多摩駅～本仁田山～鳩ノ巣駅  
開催日: 平成24年9月12日(水)

東京都の最高峰『雲取山』から眺める本仁田山は、どっしりとして美しく均整の取れた山である。朝日に輝くスカイツリーとともに、奥多摩の山々がシルエットとなり、更なる登山意欲を駆り立てられる瞬間でもある。

この本仁田山は、四季を通じてJRの駅から歩き始め直接駅に戻る初中級向きの手ごろな山である。季節によって種々のルートを楽しむこともできる。そんな中でも奥多摩駅から登り鳩ノ巣駅に下るのが、最もポピュラーで以下このコースについて概略を紹介する。

奥多摩の駅舎を背に役場前から日原川沿いに進む。橋を二つ渡り、マス釣り場から林道に入って安寺沢までは約50分。ここからは急な登りとなり、2時間程で山頂に着く。スカイツリーをはじめ東側の展望が素晴らしい。

初秋には、足元にゴマノハグサ科のママコナが

群落をなし、優しく迎えてくれる。

昼食の後はコブタカ山を經由し大ダワまで約35分、途中の梢越しには奥多摩の盟主鷹ノ巣山を始め雲取山や芋木のドッケなども顔を出す。

大ダワからは大根ノ山ノ神經由で約1時間15分鳩ノ巣駅に降り立つことができる。

登山口からの標高差が約900mあり、訓練目的の山登りにも最適で、一見さんよりどちらかと言えば常連さんの多い山である。



注…この他には杉ノ殿尾根や花折戸尾根、ゴンザス尾根等を経由するルートもあるが、それはいずれも急斜面のため経験のある方と同道されたい。

(富士光男)

# ～ 行 っ て 赤 た ゃ ん ～

## ゆっくり・じっくり植物観察

数日前よりにわか雨が続けていた6月1日、19人の参加者とともに、奥多摩都民の森(体験の森)内での植物観察を行いました。ここは、宿泊を伴うイベントで「森に触れ、森に学び、森を育てる」ことを実践している施設です。

体験の森事務所で、スタッフからの概要説明を聞いた後、体験の森の入口に当たる「トチノキ広場」から植物観察を開始しました。

まず、沢山の花を咲かせているトチノキが私たちを迎えてくれました。その後、舗装された作業道をゆっくりと歩きながら、周辺の植物に視線を送ります。「咲き終わってしまったかな?」と心配されていたラショウモンカズラも咲き残っていて、私たちの目を楽しませてくれました。ウツギの名前が付く植物の中では最も早咲きのヒメウツギも咲き残り、ガクウツギが装飾花を綺麗に開いていました。また、

二レの仲間のオヒョウの若木が、目の高さで、その特異な形の葉を見せてくれていました。

この沢沿いの作業道の傍らには、すでに花期を終えて実を膨らませ始めたハシロコクの姿がありました。

作業道から山道に入り、活動の広場を目指して登っていくと、3枚の葉が特徴的なミヤマエンレイウの姿が眼に飛び込んできました。すでに花期は過ぎて、白かった花びらが茶色く変色して縮み、膨らみ始めた種子にへばりついていました。

標高が1,000mを超えているせいか、ヤマボウシはまだ蕾の状態で、苞はまだ小さく緑色のままでした。この苞が白い花びらを思わせるようになるまでには、もう少し日にちが必要なのでしょう。

メグスリノキ広場に着く直前からにわか雨に襲われ、その先の尾根筋の植物観察のためのコースを諦め、予定を変更して下山しました。でも、植物観察をゆっくり・じっくり楽しめた1日でした。(堀越弘司)

## ～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その24 ～

### 「荒れたゴールデンウィーク」

私たち警視庁青梅警察署山岳救助隊は、今年のゴールデンウィークから、東京都の最高峰である雲取山に隊員を交代で常駐させ、山のパトロール、登山者に対する登山指導、コース案内、登山計画書の受理などをしながら、山岳遭難事故に備えることにした。

雲取山頂を都県境とする埼玉県警の山岳救助隊は数年前からGWの期間中、交代で常駐隊を送り込み、山岳遭難事故防止に大きな成果を上げており、警視庁の山岳救助隊も協力して山岳遭難事故防止に当たりたいと、上司の許可を得、雲取山常駐警備を決めたものである。

4月28日が今年のGWの初日であるが、その日は毎年春と秋に青梅署山岳救助隊が奥多摩ビジターセンター、都レンジャー、都岳連などと協力し、JR奥多摩駅前で行っている「山岳遭難防止キャンペーン」があるので、雲取山常駐は4月29日から5月5日まで実施することにした。ただ中日は上空に寒気が入り込み、雷雨などの大荒れになるとの予報も出ていた。

私は4月30日から5月2日までの予定で、橋本小隊長、市川隊員とともに第2陣として山梨県側の三条ノ湯から入山した。昨日、今日と天気は不安定ながらも雨は降らなかった。青岩鍾乳洞分岐の少し上で、昨日入山して上に泊まり、いま降りて来た第1班の飯田隊長ら3名と接触した。昨日の山の混みようは半端じゃなかったという。事故などはなかったというが、暗くなっても山荘に到着しない高齢者のパーティがあり、ヘッドランプを点け迎えに行ったところ、ヘトヘトになったパーティと接触「地獄に仏」と喜ばれたという。

情報を交換して1班は三条ノ湯に下って行き、私たち3人は頂上を目指した。私たちが雲取山頂に着いたのは午後2時ころであった。山頂は大勢の登山者で賑わっていた。

山頂に休んでいると、ふたりの青年が登って来た。ひとりサンダルを履いてペットボトルを持っているだけ。もうひとはナップザックにスニーカーである。どこかに宿泊しているのかと思って聞いてみた。「どこかに泊まっているの」「いえ鴨沢から登ってきました」「その恰好でか」「ええ、でも大丈夫です」。私も少し声が大きくなった。「大丈夫じゃあないんだよ。登山には登山のルールってものがあるんだ。ここは2000メートルの山頂だよ。サンダルで登っていい山じゃあないんだ」「すみません」。周りには他の登山者もいたが、

この無謀な青年には熱いお灸を据えておいた。ふたりは山頂で写真を撮り、そそくさと鴨沢方向に下って行った。私たちも反対の雲取山荘を目指して下った。

雲取山荘前の高台には、当隊の黄色いテントが張っており、埼玉県警の「山岳救助隊常駐所」の幟旗が立っていた。雲取山荘の新井さんへ挨拶に伺ったところ、埼玉県警の救助隊員は明日、明後日と平日なので下山したという。今晚の宿泊客は200人ほどだというが、テントの数も多かった。山荘前において、暗くなるまで登山者に対し下山コース指導などを行い、下山届けのカードも受け付けた。

夕食は山荘にお願いしており、宿泊者が食べ終わった後、山荘スタッフと共に食堂で喫し、遅くならぬうちテントに戻った。

シュラフに入った後、夜中から大雨が降り出したが、それも朝方には止んでいた。

登山客がおおかた出発した後、今日下山する橋本小隊長と市川隊員が午前9時に登山者の、後押えで鴨沢に下って行った。今日、明日と平日なので、私ひとりが残留することになっているが連休の中日は不安定な天気が続く予報だ。

午前10時過ぎ、奥多摩交番にいる佐藤隊員から連絡が入った。三条ノ湯の青岩谷付近で転落事故が発生したと山梨県警の救助隊から連絡があったという。警視庁の管轄ではないが、いま私が一番近い所にいる。このガスの中ではヘリも飛ばないだろうし、緊急を要する事故なので、下に連絡を入れ出勤することにした。

荷物をまとめザックに入れて背負い、荒れて今は通行止めとなっている雲取山西側の巻き道を三条ダールミに急いだ。そこから下りとなるので、走るようにして三条ノ湯方向に向かった。

1時間ほど降りると下からヘリの飛ぶ音が聞えてきた。下の方はガスも晴れていた。現場は青岩鍾乳洞分岐の辺りか。急いで下っていくと人影が見え、ヘリコプターがホバリングしており、登山道の下から人をホイストで吊り上げるのが見えた。あそこが現場らしい。

現場に到着すると、山梨県の防災ヘリが遭難者を収容し、下方に飛び去って行った。現場に残っていた男女に状況を聞いた。4人パーティで昨夜は雲取山荘に宿泊し、今日ここまで下って来たのだが、2番目に歩いていた男性Mさん(62歳)が石に躓き、登山道右側の急斜面を滑落し、約40メートル落ち頭を下にして止まった。動いていたが声を掛けても返事が無いの

で、意識があったかどうかわからないという。すぐにリーダーが下山し、三条ノ湯に下り救助要請したのだという。私は取りあえずふたりを連れて三条ノ湯まで下った。

小屋の中でリーダーが待っていた。三条ノ湯の主人、木下浩一さんが無線で丹波山村役場に救助要請したのだという。木下さんが山梨県警の救助隊もまもなく到着するというので、パーティから事故の詳細を聞いて待つことにした。

30分も待つと、私も顔見知りで山梨県警山岳救助隊の下山隊員ら3名が登って来た。私は簡単に事故の状況を話し、パーティ3名を山梨県警山岳救助隊に引き継いだ。

県警は防災ヘリを出動した関係上、3名に村役場まで来てもらい、詳しい状況を聞くという。私も明日から荒天の予報なので雲取山まで登り返さず、このまま県警の下山隊員の車に国道まで乗せてもらい下山することにした。

2日は天気予報通り奥多摩でも雷雨、降雪と大荒れであった。3日は3班が登るはずだったが、昨日と同じような天気予報だったし、登山者もいないだろうから常駐は中止とした。

4日の予報もあまり良くはなかったが、5日は回復するという。テントなどの撤収もあるので吉田副隊長以下3名が登った。

奥集落から浅間尾根を登り、石尾根を雲取山まで縦走する予定であった。登りはじめてから小雨が降り出した。稜線に出て干本ツツジ辺りからは本降りとなった。七ツ石山を越えた辺りでは雪も降った。雲取山荘のテント場に着いたが、張りっぱなしの常駐本部のテントは、中まで水が入り、シュラフも濡れてしまっていた。仕方なくその夜は新井さんにお願ひ山荘にお世話になることにした。こんな天気なのに雲取山荘には登山客が大勢泊っていた。

果たして翌日は好天となった。テントなどを乾かしてから撤収し、夕方鴨沢に下山した。

天候はいまひとつだったが、初めての雲取山常駐を終えた。登山者の注意を喚起することができたし、登山者に安心感を与えることができたと思う。来年からもGWにはこれを続けて山の事故を少しでも減らしていきたいと思う。

さて、5日こどもの日のテレビは、4日に起きた北アルプスでの遭難のニュースで持ち切りであった。そして翌日の新聞などによると、天気急変で白馬岳で6人、涸沢岳でひとり、爺ヶ岳でひとりの合計8人の高齢者が、すべて低体温症で死亡したというものであった。

しかし書かれているような、突然襲った悪天候などではない。私も常駐関係で、GWの天気予報は関心を持って見ていたが、何日も前から大陸からの寒気が南下していたし、地上との温度差が大きく、雷雲が発達し気温が急激に下がり、高い山では吹雪になる所もあると、常に天気予報では報じていた。事実、東京の雲取山でさえ午後は大雨や雪が降り、雷が鳴り響き大荒れの天気だったのだ。

4日、白馬の小蓮華山付近で遭難死した6名のコースは、夏山を若者が歩いてさえ8時間以上はかかる距離である。6名とも60~70代の男性で、長年山をやっているベテランと報じている。そして何と全員が九州方面のお医者さんやそのような仕事の方だという。低体温症のことは、山ヤの医師だから医学的知識はあるはずだし、大荒れになることは解っていたのだから、引き返すタイミングの判断ミスだったのか。

低体温症は以前からある病名だが、みな疲労凍死として片づけられてきた節がある。しかし3年前の7月、北海道のトムラウシ山で発生した大量遭難死亡事故で俄然注目されはじめた。

低体温症は、寒気の流入、雨などによる濡れ、それに風などが加わると体温が奪われ、恒温の36℃~37℃が保てなくなる。体温が下がるに連れ段階的に震え、口ごもるような会話、意識が薄れる、錯乱状態、呼吸が半減などの症状が現われ、28℃~26℃になると死に至る。

初期の段階で乾いた衣服を重ね着し、高カロリー食をとらなければ低体温症は進行する。年齢も影響しよう。今回の事故では、数分間でその初期段階に達した可能性があるという。

当初の報道では「ほとんどの人がTシャツにジャンパーなどの軽装」と報じられていたが、後日取材した記者や救助に当たった隊員などによれば、ダウンジャケットを着ていた人や、多くの重ね着をしていた人がほとんどというから決して軽装と非難するには当たらないようだ。

低体温症の権威、金田正樹医師も「34℃近くで判断力が低下し、自分が低体温症になっているか解らないことが多い」と言っている。6名とも医学的知識はあるが、本人たちはそれを体験したことがない。「ベテラン高齢登山者、山をあなどったか」。

## 雪渓の滴りに置きマグカップ

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

## 奥多摩昔語り

### 奥多摩の年中行事(1)

年中行事(歳時儀礼)は、正月から暮れの大晦日までの一年間にわたる諸行事のことで、奥多摩町のよ  
うな山方に暮らす者にとって、欠かすことの出来ない  
行事でした。それは、農家も山林業も商家も例外で  
はなく、社会全体の行事であり生活そのものだった  
のです。また、現在のように土日、祝祭日の休息日を  
自由にとれなかった時代は、年中行事が体を休める  
時間、休日でもあったのです。

年中行事は、もともと農耕を主体として発生したも  
ので、作物などの豊作祈願と無事に穫り入れが出来  
たことへの感謝をこめて、収穫物を神々へお供えし、  
それを食べることから始まっています。昔の日常生  
活は、現代の社会生活と異なり、それほど豊かでは  
なく、むしろ質素なつましい生活でした。そのため  
に、お正月などのモノ日(祝日)には、晴着(はれぎ)を  
着てご馳走を食べる慣わしとなったのです。

#### 1月(正月)

1月は、1年中で一番行事の多い月です。元旦から始

まる大正月や小正月など家々にとっても大きな行事  
があり、その他にも七草や鏡開き、塞の神(せいのか  
み)、山の神、恵比寿講(えべすこう)、天神講など、多  
彩なお祭りがあります。

#### 大正月

暮れの佳日(30日が多い)に餅つきや松飾りをして  
置き、煤払いなども終わって、いよいよ新しい年が明  
けて元旦を迎えると一家の主(年男)は、早朝に起き  
だして若水汲みに出かけ、その水で、雑煮をこしらえ  
ます。灯明をあげた神棚へ、小鉢に盛った雑煮など  
を供えます。また、門松や蔵や物置、外便所などにも松  
飾りを供えます(若水汲み・湧水あるいは掘り井戸、沢  
から引いてきた井戸などへ汲みに行く)。

年男は、正月3ケ日この役を受持ちます。家族の者  
たちが揃うと年の初めの挨拶を交し、餅を焼いて雑  
煮の鍋に入れ、おせち料理を並べ、それをみんなで  
食べることから1年がはじまります。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくだま

(郷土史研究家 岡部義重)

## 奥多摩歳時記

### 溪流の魚

奥多摩地方で溪流魚と言え、マス、ヤマメ類、  
イワナと大分けされるだろう。

マスは、ほとんどプール状態で水流が静止状態の場  
所で泳いでいるが、放流されて数日を過ぎたマスは、  
上流に走ったりジャンプしたりして、釣魚として実  
に面白い。しかし、残念なのは、他の釣魚より味が  
劣ると感じることである。

次にヤマメ類だが、多摩川に生息するのはヤマメ  
とアマゴの2種類である。姿はほとんど変わらず、  
その見分けは赤い斑点の有無で、斑点があるのがア  
マゴである。

多摩川流域では、上流部の山梨県側がアマゴ、東  
京都側がヤマメと思ってかまわないだろう。ただ、  
本来は、水の冷たい地域にヤマメと思っていたし、  
九州で釣れたのはすべてアマゴだったので、多摩川  
流域のこの生息分布は、私には判らない。

アマゴの味は、溪流魚では一番美味しいという人  
が多い。

次にイワナであるが、奥多摩では、北面の溪流に  
しか棲んで居ないと断言しても良い。それは、北面  
の谷の方が、残雪などに影響され水温が低い傾向に  
あるからだろうと思う。

私は青森県の下北でイワナを釣ったことがある  
が、海から500mほどで波の音が聞こえる場所でも  
釣れた。しかし、元気がなくて、すぐ横を餌が流れ  
ても知らんぷりであった。下北で、上流にヤマメが  
棲んでいたのも、なんか面白い。

イワナは、味噌汁や骨酒などにすると喜ばれる。

そして、これらは皆、鮭の仲間なので、奥多摩湖  
でワカサギなどの小魚を食べて大きくなり、ヤマメ  
はサクラマス(サツキマス)、イワナはアメマスと  
名前を変える。

しかし、私が釣った40cm台のイワナを、地元の  
人がアメマスとは呼ばずに「大きなイワナ」と呼ん  
だことから推察すると、奥多摩地方では、アメマス  
との名称は定着していないのかも。

(佐藤忠司)

## ガイドだより

### 「地名・山名の読み方」

#### その1：長沢背稜

「来さっせえ・奥多摩」24号に金さんが皇太子との思い出を記した文章がある。その中で長沢背稜の読み方に触れていたが、私は奥多摩山岳会の大先輩が「せりょう」と言っていたとガイド仲間から聞いたことがある。今では、誰もが「はいりょう」と読んでいる。

地図で見る限り、背中のような柔らかな丸みをおびた稜線ではない。むしろ脊髄のように思えてならない。そこで、もしかしたら背稜ではなかったのかという疑問が湧いてきた。本人は背稜と書いたつもりでも、印刷の時点で背稜と誤植されたり、背稜を「せりょう」と読んだり等の初歩的な誤りが重なったといえないだろうか。日本語の標準的な辞典、『広辞苑』を開いてみた。脊梁はあるが背稜はない。背稜もない。念のため、いつも昼寝をするときに高さが気に入っている簡野道明さんの『字源』を見たが出ていない。最後の手段、手元にある山の本を読み漁った。あった、見つけた、喜んだ。その本は昭和44年に発行された「山と集落—奥多摩と奥秩父—」。著者は舞田一夫さん。平成元年頃、民俗関係の仕事でお会いしたことがあるが山の話は出なかった。この方、山村民俗の会員で山の地名に興味を持っていた。雲取山の記事のなかで長沢背稜と書いて「せきりょう」とわざわざルビがふってある。やはりというか、やったアという感じだった。多分、山の場合は、背稜が正しい表記だと確信した次第。

#### その2：ウトウの頭

「来さっせえ・奥多摩」第9号に名前の由来が詳しく記されているので参照されたい。ウトウの漢字を調べたくなり、またもや『広辞苑』を引っ張り出す。「善知鳥・鳥頭」とある。鳥頭って何？ウズと読めばヤマトリカブトのことだ。岩根常太郎著『奥多摩溪谷』の奥多摩地名発音表に善知鳥窪と書いてウトウクボと記されている。彼の学識が邪魔してウトウ＝善知鳥と解釈したらしい。もしかしたら、鳥頭窪（ウズクボ）が正解ではないだろうか。

奥多摩に海鳥・ウトウがいるはずがない。ウズ＝ヤマトリカブトなら沢窪や湿り気のあるところによく見かける。背稜を「せりょう」と読む人がいるくらいだから鳥頭（ウズ）を「ウトウ」と読むのも素直にうなずける。今さら名前を変えろと言っているのではない。元をたどると、こんなことだったのかなと思っただけの戯言に過ぎない。読者諸兄弟のご意見・ご感想がいささか気になるところ。（岡崎 学）

## 施設案内

### 「一心亭」

…熟成させた「返し醤油」がかもす絶品そば…

初代・佐久間鶴吉(1頁参照)から数えて4代の歴史を持つそば店(現在は、鳩ノ巣溪谷沿いから吉野街道沿いへ移転)。

山芋や卵などでつないだ手打ちの田舎そばを、1年寝かせた返し醤油で作られた「絶品そばつゆ」で食す。口の中に広がる風味はクセになり、創業80年もうなずける。まさに絶品そば!

電話 0428-85-2231

住所 西多摩郡 奥多摩町 丹三郎 41-1

定休日 毎週火曜日、及び第4水曜日

### イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 8月21日(火) 丹三郎から御岳山のレンゲショウマを訪ねる  
応募締切日 7月31日(登山)
- ② 9月7日(金) 越沢溪谷の巨樹を訪ねる  
応募締切日 8月17日(登山)
- ③ 9月12日(水) 駅から登る本仁田山  
応募締切日 8月22日(登山)
- ④ 9月21日(金) 水根口から六つ石山  
応募締切日 8月31日(登山)
- ⑤ 10月3日(水) 関東ふれあいの道(棒の折山)  
応募締切日 9月12日(登山)
- ⑥ 10月19日(金) 海沢で滝と森に親しむ  
応募締切日 9月28日(ハイキング)

募集人員：各回30名 参加費：700円

次号発行予定：平成24年10月15日

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会